

勝田俊輔・高神信一編
『アイルランド大飢饉
ジャガイモ・「ジェノサイド」・ジョンブル』
(刀水書房, 2016)

齊藤 健太郎[†]

「ジャガイモ飢饉」の名で知られるアイルランド大飢饉であるが、歴史や文学の研究者はもちろん、専門家以外にも関心を抱いている人々が多くいるにもかかわらず、日本語での包括的な研究がないことに不満や不便を感じていた研究者は多いであろう。評者も経済史の講義でアイルランドの飢饉について話した後に、学生に参考文献を聞かれ、英語文献しか示せずに、困ったことがある。そのような意味からも、大飢饉について政治・経済・文化の各領域からバランスよくまとめた本書の出版を喜ぶたい。

とはいえ、本書の学術的貢献はアイルランド史研究の最前線で活躍している研究者たちによって、一次資料に基づいたオリジナルな研究を含む論文集として編集されたことにある。まずは各章の内容を簡単に要約する。「はじめに」で全体的な主旨が示された後、第1章では編者の勝田俊輔が「アイルランド大飢饉一概略と歴史認識」として、事実の推移と現代における大飢饉への認識の変化を紹介しつつ、問題の所在を示している。第2章「大飢饉とアイルランド経済」では、武井章弘が大飢饉の前後を通じてアイルランド経済がどのように変化したのかを論じている。従来は、農業を中心とするアイルランド経済の後進性が大飢饉の大きな要因であると論じられてきたのに対し、農業一方ではなく、リネン産業のような工業の発展と衰退の双方が、アイルランドの農村を孤立させていったとする。第3章「大飢饉とアイルランド政治」では、勝田が民衆運動と飢饉との関係を論じている。大飢饉の進行中そして前後を通じて、アイルランドでは民衆騒擾が続いており、1848年には青年アイルランド党による蜂起（とその失敗）も起こった。しかし、これらは「大飢饉の動向とは直接には無関係」であったことを示すものとなっている。第4章では、古家弘幸が「古典派経済学とアイルランド大飢饉」において、飢饉の原因の一つとされたイギリ

[†] 京都産業大学 経済学部 教授
草稿提出日 11月7日
最終原稿提出日 11月28日

スの政策と学説史的背景の関係を論じる。まず、大飢饉に直接に関わる保守党ピール内閣と自由党のラッセル内閣がアダム・スミスやエドモンド・バークらの自由放任政策に影響を受けていたことが確認される。しかし、当時の主流経済学者であるナッソウ・シーニアやJ. S. ミルらの主張は政府によって実際に施行されることはなく、政府の救恤策も彼らの議論を実現するものではなかったことが示される。この救恤策について、第5章で編者の高神信一が「政府の救済策」として、保守党・自由党両政府が窮民に実際にどう対応したか対応を整理する。これも、民族主義史観と修正主義史観との間で、長くその効果が論じられてきたテーマであり、ピール内閣の公共事業からラッセル内閣による救貧法の適用、さらに移民政策の実態について検討したのち、「ブリテン政府の救済策が十分であったとはとてもいえない」と結論される。さらに、これらの救済が民間によってどうなされたかを論じるのが、金澤周作による第6章「チャリティと大飢饉」である。地主やカトリック司祭によるものから、国内各都市での募金、さらに海外のフランスやトルコから様々な形でのチャリティがあったことがあげられるが、英本国との関係ではチャリティがむしろ両者の関係を悪くすることになったとの指摘がなされる。一方、アイルランド大飢饉が人々の関心を引くのは、その世界史への影響の大きさからであるが、第7章では、高神が「大飢饉とアメリカ移民のナショナリズム」として、飢饉のためにアメリカに渡ったアイルランド人たちの独立運動との関わりについてまとめている。第8章「インド19世紀後半の飢饉の歴史像—アイルランド大飢饉との関連で」では、脇村孝平が大飢饉を経済史的コンテクストと環境史的コンテクストの双方から論じ、アイルランド同様にイギリスの植民地であったインドとの共通点と相違点をまとめている。第9章では文化へと視野を広げて、ジェーン・オハロランが「19-20世紀アイルランド文学と大飢饉」として、大飢饉が生み出した文学的想像力の広がり論じる。カールトンとトロロープによる大飢饉へのまなざしの相違から始めて、20世紀さらに21世紀において大飢饉がどう描かれてきたかをまとめている。最後に、第10章ではアイルランド史の大家である、L. M. カレンが「大飢饉の歴史研究と20世紀のアイルランド政治」として、総括的な論文を寄稿している。章のはじめの、大飢饉研究をめぐるアイルランド史家たちの背景は、一多少、煩雑ではあるものの—歴史研究と現実との関連を示して興味深い。しかし、後半部分では、大飢饉がアイルランド社会をどう変えたのかが、様々な局面から整理される。

このように本書は大飢饉について多面的に論じているが、紙幅の制限から一点に絞って議論したい。飢饉をめぐる「市場」と「制度」の問題である。「市場」は常に経済史研究において中心的なテーマの一つであるが、近年は様々な局面での生活水準と結び付ける数量的研究が増えており、その中で飢饉が取り上げられることも多い。そこでは「機能して

いる市場」とは統合の進んだ市場であり、食糧の欠乏などの外的ショックが与えられても、迅速にもとの「均衡状態」を回復する性質をもつものとされる。この理論はフランスのクルノーらによってまとめられたが、既にアダム・スミスは食糧の欠乏が起きた際に、市場は商人たちの働きによる裁定行動によって、空間的にも時間的にも食糧を適切に配分するために、市場が機能すれば飢饉は発生しないと『国富論』で主張していた。アーサー・ヤングなどの批判があったものの、大飢饉に直面したブリテン政府の主だった人々に受け入れられたのは、このような市場論なのである。しかし、これは市場を穀物市場に限っての価格と供給の調整を論じているのであり、穀物不足地域における労働市場の動きと合わせての議論ではない。第10章でカレンは「飢饉についてのセンの研究は表面的である」とするが、アマルティア・センのエンタイトルメント理論は、研究対象が飢饉の経済的な側面中心であるという点で「表面的」ではあるものの、飢饉の際の食糧へのアプローチを市場の複層性を通じての生存能力として捉えた点で新しかったのである。ある労働者や家族の食糧エンタイトルメントは食糧市場の条件だけでは決定されない。そのような意味で、第1章の「(アイルランドの貧民は) 自らの労働力とジャガイモ栽培地を交換する形で生計を立てており、そこから収穫されるはずのジャガイモが消滅することは、労働賃金を失うことに等しかった」という指摘は、ジャガイモの生産物市場とジャガイモ生産の労働市場を考えているという点で、エンタイトルメント理論に近い議論となっている。

そこで本書における市場の論じ方には展開の余地があるように思われる。モキアアの主張するように大飢饉の間も市場は機能し続けたことは本書でもほぼ認められているようだ。しかし、ジャガイモ市場・小麦市場・トウモロコシ市場は、食糧市場という点では同じであるが、それに対面する人々のエンタイトルメントはそれぞれ異なり、たとえば小麦市場のような穀物市場に対する貧農のエンタイトルメントは非常に小さかったと考えられる。そこで、貧農にとって、機能していた（輸出入があった）としても、ジャガイモ以外の生産物の「市場」を論じることによって一種のすれ違い感を評者は感じるのである。穀物市場が機能していたこと—たとえば、輸出を禁じることの是非を論じながら、輸入の可能性を認めること—を取り上げることで、市場が機能していることと飢饉が起こったことをどのように理解したらよいのだろうか。その一方で、小麦やトウモロコシの流出入は、貧農たちにとって「市場」の意味が小さくとも、これが救恤政策のような「制度」として用いられた時、実際的な意味は大きくなる。ここでは、カレンの述べるように「複雑な性格の構造体の内部で種々の構成要素がどのような相互作用をなしていたのか」を解明することが必要であり、本書はその理解のための多くの事実を提供している。このようにみると、市場機能論だけに止まらず、制度の成否を多面的に検討している点が本書の貢献であるが、

そこでの市場と制度との関連への考察があれば、本書は方法論的にも挑戦的な研究になったものと思われる。

最後に、いくつか形式的な点を指摘したい。上の指摘と関連するが、全体の章構成に著者たちの主張に対応した構造があれば、本書はより力強い作品となっただろう。副題の「ジャガイモ・ジェノサイド・ジョンブル」は大飢饉の主要な登場要素を列挙した点で間違いのないものであるが、濃密な内容に対して平板な印象が否めない。また、本編中には多くのアイルランドの地名が現れるが、イギリス史を専門としている評者でさえ、位置の分からない地名が多々示される。簡単な地図が付されていれば、本書をより視覚的に理解することが可能だったであろう。

とはいえ、もちろん、このようなことは些末な点に過ぎない。本書の著者たちの多くは現地に足を運び、一次資料と取り組んだ経験のある研究者である。「あとがき」にある「(1985年のダブリン大学近代史学科における大飢饉関連の) 文献と本書の参考文献を比較してもらいたい。いかに大飢饉の研究が進展したのかを理解していただけると思う」との感慨は、本書を生み出した諸要素の核心の一つであろう。本書を新しい出発点に、大飢饉研究がますます進むことを願ってやまない。